

■ト部先生

・大学の地理学で、どのような課題を提示し、どのようなALの授業を展開していらっしゃると思いますか。学力の低い生徒に対する対応の関心から教えていただきたいです。

(千住桜堤中、一剣)

【回答】

当方は日本大学経済学部において教職関係科目を中心に講義を担当しておりますので、そこでの事例(「人文地理学概論」通年4単位)を以下に紹介させていただきます。

当学部は中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科、商業科の4免許の課程認定を受けており、「人文地理学概論」は中学社会と高校地歴の必須科目となっております。当科目は、教科に関する科目として人文地理学分野について一般的包括的な内容を扱い、前期に地形図読図指導に関わる基礎技能の育成を図り、後期に入るとその技能をベースにしながら農業・工業・都市・人口などの系統地理学について講じます。

当学部の教職学生は、中学校社会科教員を志す者が多く、広く地理・歴史・公民の3分野の指導に不可欠な知識・技能を育むよう努めております。しかしながら受講学生の現実は「地理や地図が苦手」とする者が大半を占めますので、そこに目線を合わせた講義が勝負どころと思ひ、徹底したトレーニングを行っております。

学生には各自、地元(出身地など)の国土地理院発行1:25,000地形図を購入させ、これをMy地形図と称して1年間持参させます。私の地形図読図指導は、従前のよくある読図とは一線を画し、具体的な「解」を見ながら「解法」を見つけさせる方法をとっており、そのためまず地図帳で各自のMy地形図の図郭範囲について把握させた上で、地図帳表現とも比較させます。またスマートフォンを机の上に置き、国土地理院の地理院地図やグーグルマップ(これらのコンテンツが「解」に相当)を参照させます(写真1)。



写真1

また、このような読図に慣れてくると、ペア学習で2台のスマートフォン（地理院地図の各種コンテンツとグーグルマップの航空写真の比較）を用い、お互いのMy地形図を相互に読図したり（写真2）、4～5名で読図の「解法」を探り合ったりすることで、自発的・協働的かつ深い読図による発見に到達させます（写真3）。



写真2



写真3

以上が、経済学部でのALですが、これはあくまで大学における教員養成での方法ですので、あまり参考になるかどうか不明です。ただ中学校社会科地理的分野では、地形図はもちろんのこと、とくに地図帳を中心とした地図指導が必須ですので、学力の低い生徒、もしくは地図が苦手な生徒への対応が強く求められるものと考えております。

ここ数年、当学部での地図が苦手な学生と接することで、どうすれば地図アレルギーを緩和できるか？なぜ地図嫌いが発生するのか？どのような地図指導が望ましいのか？について向き合っております。とくに苦手な学生（生徒）は、具体的に地図のどの部分を見て、どのように理解しようとしているのか、当人の視線や指の動きに着目しな

がら、その方略パターンを探ってきました。その結果、そのような学生（生徒）の地図スキルは地名などの文字注記にのみ依存し、道路や河川、県境線などの「線」の形状や、地図の「点」「面」情報を軽視していることが判明しました（もちろんこれは大人の不適切な地図スキルにもあてはまります）。

こうした問題に直面し、地図指導は視角情報として地図帳や地形図などの見せたい部分は「書画カメラ」を通してスクリーンに掲示し、確実に視角情報を共有化します。また机間巡視しながら、苦手な学生には直接、地図の方略を極力提示するようにしています。逆に地図が得意な学生がいれば、その方略を極力プレゼンさせて紹介します。つまりALでは、こうした得意な学生の力をうまく借用しながら（写真3の指で示す男子学生）、協働学習を展開させるようにして対応しているところです。

なお当方のAL授業の紹介については文理学部の授業例も含めて、昨年の月刊地理11月号（古今書院）に拙稿を綴っております。ご参照いただければ幸いです。



卜部勝彦（2016：地形図の新たなる読図指導 ～大学教職課程における指導実践の試み～. 地理 61 卷 11 号、26-33 頁

（日本大学経済学部 卜部勝彦）